

第24回日本認知症ケア学会（京都）

2023年6月3日（金）～6月4日（土）

食事摂取拒否のある認知症高齢者へ介入した一事例

聖志会渡辺病院 看護部 D3 病棟

友寄直美 山出真理 岡田由美 北島由佳

【はじめに】認知症高齢者のケアにおいて、誤嚥を未然に防ぎながら食事量を確保することは大切である。今回、食事摂取拒否がみられた認知症高齢者の方に対して、見た目を重視したことにより食事量が改善した事例を報告する。

【倫理的配慮】本研究に際して、施設管理者の承諾、家族の同意を得、個人が同定されないよう配慮した。

【対象】A氏、90歳代、女性、正常圧水頭症シャント術後、アルツハイマー型認知症。X-3年から歩行障害出現。正常圧水頭症の診断でシャント施行。X年施設にて他の入所者に暴言見られたため当院に入院。入院当初から食事量が少なく、食事摂取拒否があった。HDS-R13点、認知症高齢者の日常生活自立度M、障害高齢者自立度B1、身長144cm 体重40.6kg、BMI19.5。嚥下障害スクリーニングテストEAT-10：1点

【方法と結果】誤嚥防止と1日1200Cal摂取目標のため、朝コーヒーパン粥、昼夕は全粥刻み食にした。朝は全量摂取するも昼夕に残りが多かった。コーヒーパン粥が好きというので3食ともに変更した。1週間は良好な摂取が続いたが次第に拒否が増えた。家族からプリンが好物であると同い、昼にプリン食、夕は液体栄養食とした。しかし、テーブルに着くも食事に手を付けず、理由は話してくれなかった。面会室で家族と「たこ焼き」を美味しそうに食していたため、看護師から管理栄養士に相談を持ち掛けた。見た目を重視するように固形物を十分加熱し、形がある食事に変更した。主治医も賛成した。その後毎回全量摂取するようになり、管理栄養士、医師も摂食状況を確認した。

【考察】認知症超高齢者の食事において、誤嚥予防に重点をおき、形のない粥、刻み食を提供したため食事量の低下が続いた。そこで固形物を柔らかくし、見た目を重視したことにより食事量が増えことから、食事の楽しみに注目した食感、盛り付けが大切であることを再認識した。